

「僧侶の服装に見る「相承」」

徳島県城満寺 田村航也

お坊さんの服装はどのようなものか、よく気を付けて見たことはありますか。

お坊さんの着るものと言えば、まず「お袈裟^{けさ}」です。お袈裟は、実は遠くインドのお釈迦さまからずっと伝わっているものです。お弟子さまから「私たちは、どんな服を着たらよいでしょうか」と尋ねられたお釈迦さまは、「この目の前に広がっている、すばらしい田んぼのような服がよい。色も、原色のように派手ではないものに」と答えられました。その時から、田んぼの形に縫い合わされて、地味な色に染められた「お袈裟」を、お坊さんは着るようになりました。よくご覧いただければ、田んぼの形をしたお袈裟の縫い目を見ることができると思います。お袈裟は、「偏袒右肩^{へんだんうけん}」といって、必ず右肩を出して着ます。これは、両肩にお袈裟をかけておられる仏さまに対する敬意を示しています。「袈裟懸け^{けさが}」などというのは、この着方でできるお袈裟の斜めの線に沿っていることを言っています。

お袈裟の下には、何を着ているのでしょうか。袖が長くて裾に襷^{ひだ}のついた、「ころも」を着ています。黒い衣を「墨染めの衣^{すみぞ}」などと言いますが、正式には「直綴^{じきとつ}」と言います。もともと上下に分かれていた衣をひとつに縫い合わせて真っ直ぐに綴ったので「直綴」と呼ぶのですが、これは中国の服です。袖がとても長いので、直綴を着たお坊さんは立っている時にも手を下におろさず、胸の前で「叉手^{しやしゅ}」をして組んで、袖が地面に付かないようにしています。曹洞宗の禅の故郷である中国のお坊さんたちが着ていた服と礼法を慕って、今に伝えているのです。

さらに、直綴の下には、あまり見えませんが、「着物^{きもの}」を着ています。模様のついていない無地の着物で、これは日本の服です。お釈迦さまはお袈裟だけ着ていましたが、私たちの国ではそれではとても寒いので、下に重ね着をしています。いかがでしょう、このように見ますと、インド、中国、日本、まるで海外旅行をしてきた気分ですね。実際に、私たちに伝わっている禅の教えは、お釈迦さまからずっと、二千五百年の時を越えて、インドから中国を経て日本まで、旅をして来ているのです。お釈迦さまのように穏やかに生きたい、お祖師さまや太祖瑩山禪師さまのように坐禅をしてしっかり生きていきたい、みんなを幸福にしていきたい、という私たち人類共通の願いに乗って、お坊さんの服装も、国境を越え海を越え山を越えて、今に「相承^{そうじょう}」されています。お坊さんの服装を、ぜひ一度よく見てみてください。それだけで、太祖さまにも、お釈迦さまにも、出会うことができるのです。